

金芝河作品集

1



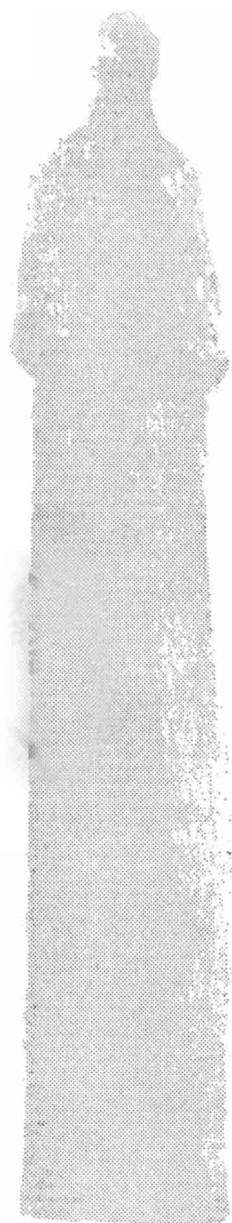
井出愚樹編訳
青木書店

金芝河作品集

1

井出愚樹編訳

青木書店



い で ん じゅ
井 出 愚 樹

1937年 高知県に生まれる

訳 書 『わが魂を解き放せ』(大月書店, 1975年)

『良心宣言』(大月書店, 1975年)

金芝河作品集 1

1976年1月20日 第1版第1刷印刷

1976年2月1日 第1版第1刷発行

* 定価はカバー, 売上カードに表示

著 者	金	芝	河
編訳者	井	出	愚 樹
発行者	山	根	襄

発行所 株式会社 青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60

振替口座・東京36582番

電話・東京(292)0481(代表)

郵便番号 101

(分)0098 (製)8174 (出)0015 第一印刷・高地製本

© 1976, Aoki-shoten, Tokyo

目次

良心宣言

苦行……1974

五行

民族のうた、民衆のうた

諷刺か自殺か

ナポレオン・コニヤック

チノギ（真五鬼）

作品解説

訳者あとがき

307 304 187 143 119 107 63 41 1

良心宣言

正義と真理を愛するすべての人びとにこの文を送る。

実に途方もない謀略が、いま私に張りめぐらされている。朴政権の抑圧者たちは、私を、カトリックに浸透したマルクス・レーニン主義者に、民主主義者をよそおった共產主義者に仕立てて投獄した。彼らはほどなく私を、狡猾陰險な共產主義者として、永遠にそして「合法的」に烙印を押すための裁判遊びを始めるであろう。その結果、私は、この国でつくり上げられてきた数限りのない官製共產主義者の隊列に、押しこめられることになろう。

はつきりいっておくが、この謀略は、私個人をのみ対象にしたものではなく、われわれの民主回復運動全体と、社会正義の具現のためにたたかってきた新旧キリスト教会にたいする中傷謀略騒動の一環であり、とりわけカトリック正義具現全国司祭団の活動と民主回復国民会議、およびいっさいの青年学生運動を容共にしたててこれを圧殺しようとする、大弾圧の予備作業

なのだ。

現在の私の率直な心境では、私自身にすでに数年来加えられている朴政權のこの種の卑劣な常套的な謀略について、一言たりとも弁明したくない。また私を取調べた中央情報部員たちは、「いっさいの主張と弁明は法廷でやれ」といっており、この事件にかんするたとえ最小限の真実でも私は法廷の場で明らかにするつもりであった。

しかし、事件が私自身の根本的な思想と社会的根拠を歪曲し、破壊しているばかりでなく、ひいては民主勢力全体、私が所属する教会、そして私の後輩学生たちに甚大な被害を拡大するおそれのあるこの時点において、私は良心にもとづき自らの思想と、真実を明らかにすることこそ、歴史と民族にたいする私の義務であると考えてる。

一 私共産主義者か

一言でいい切って、私はかつて自分自身を共産主義者と考えたことは一度もなく、現在でも私はけっして共産主義者ではない。私をさして共産主義者と呼ぶ中央情報部の発表は笑止千万である。弁護人から聞くところによると、彼らは私が中央情報部第五局の地下室で書いた、私

のいわゆる「自筆陳述書」⁽⁴⁾なるものを世に発表し、あたかもそれが、私が共産主義者であることを証明する決定的な証拠となるかのように宣伝している。問題の陳述書（第三回目的のものを第二回に書きかえ、第二回目的の調書は破棄処分にしたもの）が私自身の肉体の一部分によって書かれたことは事実だ。

しかしながら、それはけっして私自身の自らの意志によったものではない。無力な一個人が大韓民国の大中央情報部で書いた一片の紙切れを、あなた方はどれだけの信憑性があると考えたのか。中央情報部に連行された当初から、私は「カトリック教会に浸透した共産主義者」であることを認めるよう強要された。五、六日間、私は自分が彼らの「ローラー」にはさまれて「赤いのに烏賊^{いか}」にされるのを拒み、抵抗をつづけた。私は中央情報部に連行される前から体が衰弱しきっており、貧血から卒倒したり、極端な不眠症に悩まされていたが、五、六日間、もちこたえているあいだ、極度の精神的な試練と肉体的疲労に耐えながら、私の体力は限界点に達し、意識すら混乱状態におちいった。

私は朴政権がいかなる手段に訴えても私を共産主義者に仕立て処断するという基本方針を固めているかぎり、中央情報部で真実を明らかにする努力を払うことが、いかに愚かしいことであるかを悟った。そればかりか取調官たちは、彼らの主人からなんとしてでも私を共産主義者

に「仕立てあげよ」と敵命を受けているのであり、幾晩も徹夜しながら自らの良心に恥じるふるまいをしている哀れな末端捜査官とこれ以上、神経の消耗戦を演じ、争う必要はないと感じたため、六日目に、私は、彼らがあらかじめ作成してもってきた、いわゆる「自筆陳述書」なるものの内容を、彼らが口述するとおり、落書みたいに書きなぐり、投げ捨てたのである。問題の「自筆陳述書」なるものが作成された経緯はこのようなものである。

したがって、当然ながら、陳述書なるものの内容は、虚構と自己矛盾にみちたものとなっている。「貧困と疾病からきた劣等感と挫折感のゆえに共産主義者になった」というセリフは、彼らが好んで用いる常套句であって、このくだりはあの陳述書のなかでも私にとっては最も嫌悪に堪えない部分である。彼らは、「五賊」事件のときも、「蜚語」事件のときも、そして民青学連事件のときも、まったく同じ文句を公訴状やその他の文書にくり返し使ってきた。

貧しいもの、病めるものは、みな「共産主義眞犯」ということなのか。

あなたがたは誇りある一個の人間が、はたして、そのような卑屈な陳述を、「自らの意志」をもってなすことができるかと考えるのか？

（彼らが私に強要した）陳述書によれば、私のすべての行為、はなはだしくは、「五賊」と「蜚語」の執筆すらも、共産主義思想からなされたものとされている。そうだとすれば、全

世界の読者たちは、私にだまされていたというのか。世界のあらゆる評論家たちは「五賊」と「蜚語」に誤った評価を与えた罪のゆえに問責されねばならないのか。文学作品は自らそれ自身の主題と思想を語るものである。「五賊」がもし共産主義文学であったとすれば、どうしてそれにたいする裁判が四年以上も延ばされていたのか。「蜚語」については、なぜに起訴すらされなかったのか。

陳述書はまた私が共産主義者であると同時に、カトリック信者であるという。「カトリックを信じる共産主義者」とは、いわば「熱い氷」という言葉のごとく形容矛盾である。共産主義者が宗教、とりわけカトリックを、百害あって一利のない、いわゆる「人民のアヘン」とみなしていることは、三尺の童子さえ知っている事実だ。以上のようなでたらめな陳述書——彼らが「任意」に陳述し、私が「自筆」をもって書きとった彼らの脚本のほかにも彼らは、私がかつて読んだ幾冊かの書籍と、私が獄中でしたためたメモをもって、私が共産主義者であることを立証する証拠だと宣伝している。これが、彼らが示す「証拠」のすべてなのだ。冷静に考えてもみてほしい。いかに思想の自由、学問研究の自由が奪われている韓国の社会とはいえ、カール・マルクスの古典ごときのものを何冊か読んだことが、どうして共産主義者だという証拠になるというのか。

なぜ検閲官には左傾書籍を読むことが許され、知識人を含む一般市民にはそれが許されないのか。私が今まで読んだ数百冊の書物のなかで、彼らが私を共産主義者に仕立てるための「証拠」として押収した左傾書籍は、毛沢東の『矛盾論』一冊を含めて計一〇冊にも満たない。これらの書籍はしかも外国においては知識人必読の書とされている古典的著作にすぎない。また獄中での情念や、思索の糸口、作品のイメージのようなものを、断片的に書きとめた私の手帳のどこを調べてみても（もし彼らが証拠の手帳のすべてを公開するならば、そのことはいうまでも明らかとなるだろう）、私が抑圧と収奪を徹底的に憎悪し、それを取り除く道を求めて思想的模索をくり返しながら、自らを鞭打ってきた軌跡は見いだしても、私が共産主義者として一つの確立した既存の思想体系をもった人間という証拠はどこにもないであろう。それならば、私は自分自身の思想を、正確になんだと規定しうるであろうか。これにたいする解明を試みる前に、私はまず二つの点を前提にしなければならないと思う。

第一に、私は自分自身を、自由な考え方の持主だと見なしている。私は自分の思想が、個人的な欲望に左右されるとか、あるいは脅迫などに屈服することがないだけでなく、いかなる独断、いかなる教条にも縛られないものであることを望む。したがって、私はかつて一度なりとも自らを何々「主義者」だと規定したことはなかった。自由の混沌のなかで造りだされる創造

的緊張のなかに、絶えまなく自らを投げ入れることによって、真の認識に到達しようとすること——これが現在の私の姿である。

第二に、私はまだ思想的に未熟な人間だ。私はいまに至るまでいかなる既存のイデオロギーの選択を決断したことがないのはもちろんのこと、私自身としても一つの理路整然とした確立した思想体系をもつことができないでいる。言いかえれば、私は今なお彷徨と摸索をくり返しているにすぎない。このような事実はある意味ではきわめて恥ずかしいことだ。しかしながら、このことが必ずしも諍りを受けるべきことでもなければ、私個人の責任でもないと考えるのである。思うに人間の内なる思想と良心は絶対に自由であるべきであり、またその形成の過程も絶対に自由でなければならぬ。これは人間の天賦の権利であり維新憲法でさえこの権利は保障するという事になっている。にもかかわらず、韓国社会においては、思想の自由も、それが形成される過程の自由も事実上極度に制約されており、統制された画一的な思想と偏見ばかりが支配している。これはわれわれが自身の精神的な成長過程を振り返ってみれば誰の目にも明らかなことだ。

極度に統制された情報の入手、極度に制限された読書範囲、そのほかにもありとあらゆる非合理的な偏見とタブーが乱舞する不毛の精神風土——このなかで、われわれの、そして私の思

想は、懷疑と悔恨のなかをさまよい続けねばならなかった。

このような状況を念頭におくならば、韓国の社会に、いわゆる「自生的な共産主義者」なるものは事実上存在しうる可能性はまったくないと言ってよい。

「共産主義者」といえば、われわれはほとんど条件反射的に、角を生やした真赤な顔に、血がしたり落ちる長い爪をはやした悪魔を連想する。これは今日、韓国に住んでいる三〇代以下の人間に共通した精神的土壌である。のみならず、われわれは共産主義の理論についてきわめて感情的な罵倒以外に何一つ教わることができなかった。このような風土のなかで、たとえ幾人かの人が好奇心から、人目を避けつつ、こっそり息を殺して左傾書籍の何冊かを読んだからといって、どうして確固とした徹底した理論と信念を備えた共産主義者が形成されることができようか。これが私が、韓国の青年層から「自生的な共産主義者」が発生することは絶対にありえないと断言する根拠である。

私もまた例外ではない。言いかえれば、私は共産主義者であるどころか、いったい共産主義とは何であるのか、共産主義国家における生活とはどんなものであるのかすら、ほとんど何一つまともな知識をもちあわせていない人間だ。その私が共産主義者であるとは、身に余るお言葉と申し上げるほかはない。

二 民主主義と革命と暴力について

私は、隣人を、抑圧され搾取され、苦しみと蔑みのなかで人間としてのあらゆるものを奪われている具体的な人たちを、体全体で、熱く実践的に愛する人間となることを願っている。これが、自らに課した、私の人間的な課題のすべてである。これが私のあらゆる思想的模索の出発点であり、同時に帰着点である。ゆえに私は自分の思想的模索の全過程が、人間にたいする愛という観点から解釈されることを願う。

私は自分の兄弟たちを愛するがゆえに、彼らを非人間化している地上のすべての抑圧と収奪を憎悪する。それは抑圧される者ばかりでなく、抑圧する者すらも徹底的に非人間化するものだ。このゆえにこそ、抑圧と収奪に抗してたたかうこと——これが私の思想的、実践的関心のすべてである。

私がカトリックに入信したのは、カトリックが、精神的桎梏と物質的桎梏を同時に克服し、抑圧する者と、される者をまた同時に救うことによって、抑圧それ自体の絶滅という思想を、普遍的な精神として提示したからであつた。その信仰はまた、たがいに矛盾し衝突しあうさ

さまざまな思想や理論、判断などを、摂取し溶解して、普遍的な真理としてのなにかを提示してくれるからであった。私が、朴政権と五賊の群れに反対してたたかってきたのは、彼らこそが韓国の社会において、抑圧と収奪をほしきままにしてきた犯罪の張本人であったからである。

私の思想は、民衆にたいする愛と、同時に彼らにたいする信頼のなかから芽ばえた。私は自分自身が、その一員として抑圧された民衆のなかで育まれながら、抑圧者が社会に押しつけてきた民衆にたいするあらゆる先入観——卑賤、醜惡、道德的墮落、先天的な怠惰、品性下劣、無知、無氣力といった一種の劣等人種的な卑下が、なんらの根拠もないものであり、それらにむしろ、抑圧者自身にあてはまる性質のものであるということを確認した。私が体験した民衆の姿は、正直で、勤勉で、愚かに見えて豊かな天の知恵を備えており、力なく無氣力に見えながら、実は偉大な力と強い意志を秘め、粗野ではあるが隣人にたいして人間らしい温かい愛情をもった、堂々と誇り高く、たぎる力にみちた姿である。

民衆を信頼することによって、彼らが自らの運命を開く鍵を手にしたときこそ、すべての問題は正しい解決に向かうであろうとの確信をもつと同時に、そのような、偉大な民衆の時代は必ず来るということについて、不動の信念を抱くようになった。この確信が私を民主主義にた

いする徹底的な信奉者に育てる原動力となった。

民衆を信頼することができず、抑圧者の注入した倒錯した価値観をもつ者は、一貫した民主主義者となりえず、終局には王制の側に立つようになるだろう。

民主主義とは何か。それは沈黙に反対するものであり、自由な「言葉」を意味するものであり、そのゆえに、隠されたすべての真実が、あますところなく白日の下に曝されることを意味する。私は、真理が、ただ真理のみが、人間を解放するものであることを信ずる者である。暴露された真実が抑圧者の呪術に縛られ、沈黙の文化のなかに繋がれている民衆の意識をゆさぶり、解き放ち、彼らを自由な批判精神の暴風雨が荒れ狂う曠野に導き出すときこそ、⁽⁵⁾はじめて民衆の時代が訪れ、民衆の歴史は、創造主によって約束された正義と自由の地、カナンに向かうようになるであろう。これが私の夢であり、私の信仰である。

私は、カナンの地がどのようなものか、正確に描くことはできない。それは、一人の個人によって描かれるものではなく、民衆の手によって創造されるべき性質のものであろう。民衆が自らの手に、自らの運命の鍵を握りしめることができるようたたかうこと——そこまでが私の課題である。

そういう意味から、私が要求し私がたたかうと欲するものは、徹底した民主主義、徹

底した言葉の自由——それ以下でもそれ以上でもない。またこの意味から私は、基本的に民主主義者であり、また自由主義者である。私はカトリック信者であり、抑圧されている韓国民衆の一人であり、そして特権と腐敗と独裁権力を心の底から憎悪する一人の若者であるという事実以外に、自分自身を強いて何々主義者と規定せよと言われるならば、私にはこれ以外の返答は出しようがないのだ。

民主主義は「国民を愛する慈愛深い為政者」を要求するものではなく、民衆の血と、民衆の剣を怖れる権力を望むものだ。民主主義は帰するところ、圧制にたいする限りない拒否を意味する。民衆が、自らが望まない政治権力を廃止する権利なしには、民主主義はなりたない。したがって、民主主義は民衆の革命権を拒否するものではなく、むしろそれを最終的保障として存立するものである。われわれはこの自明の真理から目をそらしてはならない。

革命の保障、ある意味では常識的そして恒久的な革命の可能性の存在は、民衆が支配者を手綱でさばき、抑圧と収奪を排除してゆく根本的な動力である。逆に革命を禁圧しタブー視することは、支配者側にとっては民衆を抑えこみ抑圧と収奪を永久化する手段である。

このゆえに私は反抗と革命の信奉者にならざるをえない。私は永くうけつがれてきたわが民族の伝統を愛し、そこに限りのない民族的誇りを感じる。民衆の自己存立のための批判と抗議

を、強権をもって圧殺し、露ほども悔い改めることを知らない権力にたいし、民衆は革命以外のいかなる方法をもって対処しうるであらうか。

トーマス・アクィナス以後のカトリック政治思想においては、民衆の生存をおびやかしかし共通善を侵害する明らかな暴君的圧制を打倒する、自然法にもとづく権利と義務が、民衆にはつきりと与えられていると認められてきた。これは、抑圧によって失われた民衆自身の人間性を民衆自らが回復する転換点をもたしらしてくれるものであって、これによって民衆は急激かつ広範な覚醒、すなわち歴史が飛躍する奇蹟をひき起こすのである。

反抗と革命は、その過程において、多かれ少なかれ暴力的現象を伴う。権力側の抑圧的暴力が持続する場合、民衆の意志は磨滅し、いわゆる「沈黙の秩序」がつくりだされる。そのため、この死のような秩序を打ち破る暴力がさけられない場合もおこりうる。私は一応はこのような「暴力的」現象を肯定する。いな、肯定せざるをえない。しかしながら、この場合私が肯定する暴力は、抑圧する暴力ではなく抵抗する暴力であり、人間性を剝奪する暴力ではなくそれを回復する暴力である。それは「愛の暴力」と呼ばれて然るべきものだ。

聖殿を冒瀆する商い人の頭上に打ち下ろされたイエス・キリストの鞭は、まさにこのような「愛の暴力」であった。それは抑圧され収奪されている民衆のみならず、抑圧し収奪する圧制